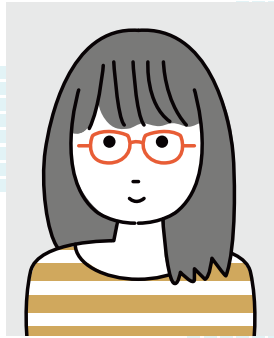




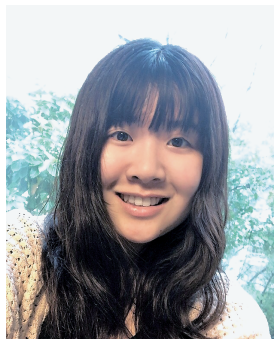
高橋 玲加さん
Reika TAKAHASHI

私は、海外の政治経済に興味があります。海外でどのような問題が起こっているかを単に知るだけでなく、その問題が起こった背景、過去の出来事とどう関係しているのか、日本にどのような影響を及ぼしているのか等を考える力を、授業を通してつけています。特に世界教養プログラム応用科目の「世界時事」という授業を通して、興味により深まりました。この授業では、世界で起こっている、ある一つのニュースに対して、各メディアでの報じられ方にどのような違いがあるのかを見比べて記者の意図を分析したり、例えば今であればコロナウイルスのワクチンを得られる国とそうでない国に格差が生じる原因を、各国の背景や外交関係を考慮しながら考える力をつけたりすることができました。この授業を履修し終えて以降、海外のニュースを以前よりも意識して見るようになりました。色々とニュースを追っていく中で、最近ではSDGsに興味を持ち、自主勉強をしたり、所属している学生団体のメンバーと勉強会を開いて一緒に勉強したりしています。また、実際に学んだことを活かして清掃活動を行ったり、SNSで発信をしたりするようになりました。今期からは「世界時事」の担当をされていた先生のゼミに入り、学びを深めています。自分の興味のあることを学べるだけでなく、先生が様々なセミナーやイベントを紹介してくださるので、それに参加して自分の興味の幅を広げています。世界教養学科に入ったら、幅広い分野の学びに触れることができます。今、自分が何に興味があるのか明確でない方でも、様々な分野の授業を通して自分の興味を見つけられると思います。この学科で力をつけて、共に未来にワクワクしていきましょう！



梅村 京伽さん
Kyoka UMEMURA

大学へ入学する際、第一に抱く考えと言ったら、「何を学ぶことになるのか」でしょう。当時の私は、語学能力に自信があるわけでも、これと決まった学問を学びにここへ入学したわけでもありませんでした。只々「知らないことを知りたい」という一心で足を踏み入れたのです。言わば、知的探求心を満たすためにやってきたと言えます。その点では世界教養学科という場所はこの上なく整った環境です。英語だけでなく、兼ねてより興味のあったドイツ語も「複言語プログラム」の過程で学ぶことが出来ましたし、芸術、各国の歴史、宗教と言った文化的なことから、統計学的な視点で世界を眺めることも、果てはプログラム言語のような専門的な知識まで。私は、もしかすると少しお行儀が悪いとも言えるほどに、好き放題に欲しい知識を欲しいだけ貪りました。しかしその皿には、まだまだ食べきれないほどの知識が残っているのです。そんな世界教養学科ですが、最も魅力的と言えることは、また別のところにあります。それは、「知識に食欲になることを咎める者は一人もいない」という点です。むしろ、推奨しているようにも見えます。欲しい知識を「欲しい」と思ったのであれば、それを肯定し、積極的に協力してくれます。何が欲しいものか分からないのであれば、選択肢を提示してくれます。彼らは与えることを厭わず、また取り上げることは一切しません。まるでコース料理のように、あるいはビュッフェのように次々と運ばれてくる全てが私の好奇心を酷く惹き付け、思わず新しいものに手を伸ばさずにはいられない程に色鮮やかに見えるのです。私は今、3年生というコース料理の半ばにいる者ですが、この魅惑的な席を立とうとは思いません。これからも思う事はないでしょう。



小林 陽さん
Minami KOBAYASHI

私は、中学生から高校生にかけて経験した異文化体験から、言語や異文化に対して興味を持つようになり、他国の文化だけではなく、自国の文化に関しても理解している必要があると感じました。そこで、幅広い教養を身につけることのできる世界教養学科で学びたいと思いました。そして、入学してからの1年間幅広い分野に触れることができました。特に影響を受けた講義は、「日本理解の方法」、「世界の美術と音楽」、「日本の歴史と文化」です。これらの講義を通して、文化と言語には関連性があることに気づきました。例えば、宗教は、各国の価値観に影響を与えるだけでなく、言語にも強く反映しているということです。1年次の講義を通して、2年次は、より文化的教養を身につけるために、ワールドスタディーズコースを選び、「文学と翻訳1」、そして世界教養プログラム応用科目である「キリスト教の世界」などを受講しています。「キリスト教の世界」では、キリスト教の思想だけでなく、日本人の潜在的な宗教的価値観も含めて学んでいます。また、ジェンダーやボランティアなど新たに興味関心が生まれたため、それらの分野に関する講義を受講していきたいと考えています。2020年は、コロナ禍ということで、全面オンライン授業でした。初めての大学生活、慣れない授業形態の中で、大変なことはたくさんありましたが、自ら積極的に発言するなど真剣に学びに向き合うことによって、多面的に物事を捉えられるようになりました。また、オンラインで留学生と交流できるプログラムに応募し、コロナ禍だからこそその貴重な体験をすることができています。私は、これからも幅広い教養を身につけるとともに、語学検定の取得なども目指し、勉学に励みたいと思います。

名古屋外国語大学 世界教養学部



世界教養学科

世界を学び、未来を描き、人生を築く
～教養とは、めざす自分へ羽ばたくための翼～

Department of World Liberal Arts

● 世界教養学科とは

「学び」とは、宝探しです。私たちが生きるなかで直面する様々な問題は、宗教の問題、政治の問題、ときれいに分けることはできません。さまざまな専門分野の知見を自分の引き出しにしまっておく必要があります。世界中の問題を探索するため、知識を深掘りするためには、興味のある分野を1つに絞る必要はありません。みなさんも自分だけのお宝をさがしてみませんか？

● 学びの特徴

映画や言語、音楽、SNS、人種、政治経済などさまざまな分野の興味・関心をきっかけに学問へつなげます。学びを深めるために、基礎言語力として、英語（専攻言語）と複言語（11言語から選択）を学習します。英語+もう1言語を運用することで、言語を切り口に、文化、文学、歴史、社会を包括的に学ぶ思考力を育みます。

● 育てたい人間像

豊かな人間性で、世界の多様性を理解して活動することができる人間

豊かな知識と言語力をもち、それらを活用して、問題解決へ取り組むことができる人間

豊かなそうぞう（創造・想像）性をもち、他者への共感力、寛容さを兼ね備え日本の国際的発展へ貢献できる人間



世界教養学科長／教授

ダグラス・ウィルカーソン
Douglas WILKERSON

世界教養学部世界教養学科では、英語をはじめ複数の外国語による高いコミュニケーション能力と、世界の多元性・多文化性を見据えつつ、国家・民族・地域等の枠を超えた「世界教養」を修得することで、豊かな共感力と高い発信力を備えた高度職業人・高度教養人を養成します。目指すのは、既成の枠組みや慣行に捉われず、自由かつ創造的な姿勢で物事を探究し、そこで得た経験・知識・洞察力をもって、世界のどの地域でも幅広く活躍できる「世界教養人」です。世界教養学科の専攻言語は英語であり、「英語基幹プログラム」と「専攻言語プログラム」で英語運用能力の強化を図ります。また、複数の言語を通して文化の多様性を学ぶ「複言語プログラム」に加え、世界基準の教養を備える「世界教養プログラム」が加わる教育課程となっています。そして、特定の業界・業種へ就職する力、単なる就職テクニックを身に着けるのではなく、教養を身に着けることにより、自分に合った仕事を自ら見つけ、自らの力で進路を切り拓ける人材を育成します。このような人材を育成するため、世界教養学科には人文分野から社会分野、学際分野にわたるさまざまな領域を専門とする教員が所属しています。

教養とは何か

世界で生きていくためのツールの詰まった宝の箱

私たちの学科は「世界教養学科」といいます。でもそもそも「教養」とは何でしょうか？

英語にはliberal arts(リベラル・アーツ)という言い方があり、名古屋外国語大学で言う「教養」に近い概念と言えるでしょう。狭い専門に偏らず、幅広く身につけるべき一般教養科目のことと考えていいのですが、そこで重視されるのは、知識の詰め込みではなく、自分が出会った状況に応じて自由に批判的に考える力です。

しかし、日本語で「教養」というと、響きはいいけれども、実用的ではなく、世の中ではあまり役に立たない「飾り」のようなもの考える人もいるでしょう。それに「世界」がついて「世界教養」となると、漠然としてわけのわからないものに思えるかもしれません。しかし、世界とはすべての人間を取り巻き、一人一人が何らかの形で接触し、不断の相互作用のうちに生きる場にほかなりません。そして教養とは、人間がこの世界の中で生き、世界と関わるための方法なのです。ですから、教養は究極の「実学」ではないでしょうか。

大学で学ぶ皆さんには、自分で選んだ専門を深く習得するとともに、世界の中で生きていくために必要な広い教養を並行して身につけてほしいのです。大学とはこのように「深さ」と「広さ」が出会う場所です。

教養は、皆さんのこれから先の長い人生を充実した豊かなものにするために必要な、魅力的で役に立つツールがぎっしり詰まった宝の箱みたいなものです。決して飾りなどではありません。

英語＋複言語 ～学ぶための基礎言語力～

4年間を通して英語＋複言語(11言語から各自選択)を学びます。本学の英語授業は「読む・聞く・書く・話す」の4技能を学ぶ基礎的なクラスに加え、学んだ知識を英語で活用するための運用力を育てる発展的なクラスで構成されています。複言語は他学科と比較して必要単位数が多く設定されており、複言語を学ぶだけでなく活用することを重視しています。日本語、英語、複言語の異なる3言語を使いこなすことで、さまざまな知識を多角的な視点から獲得することを目指します。

英語教育について



教授

菊地 俊一 Toshikazu KIKUCHI

世界教養学科の専攻言語(英語)の授業は、英語力診断テストの結果によって「初級」「中級」「上級」の3つのクラス分けがあります。新入生はコンピュータによるオンラインテスト、2年生、3年生、4年生は主にTOEIC、TOEFLの点数で分けます。大学での授業の内申点に相当するGPAも判断項目になることがありますので、入学後の日々の授業も真剣に取り組む必要があります。「初級」は留学の夢を実現するには英語の基礎力が不足していると判断されますが、授業担当教員が英語の基礎力アップのために丁寧に指導します。「中級」は英語の基礎力はあると思われそうですが、世界を相手にするにはやや実力不足と判断され、授業では「上級」を目指した指導が行われます。「上級」は英語の基礎力が十分にあり、学生が各自で応用・発展的な学習ができるよう、教科書にとどまらず国内外の新聞・雑誌、ニュース番組、TED Talks等を活用しながら、充実した留学をし、国際機関や外資系企業への就職にもチャレンジできるよう指導します。リベラル・アーツを深める学科にふさわしく、「文学」「哲学」「宗教」「芸術」の話題に加え、教科書で扱うトピックは人工知能や宇宙に関わる最先端の科学記事からアニメやK-POPに関わる若者文化まで、多岐にわたっています。こうしてReadingの授業で培った幅広い教養を英語で発信するために、Oral Presentationの授業が1年生から4年生までの学年にも配置されています。

Department of World Liberal Arts

世界・日本の捉え方をより多様に

専門性を高める コース科目

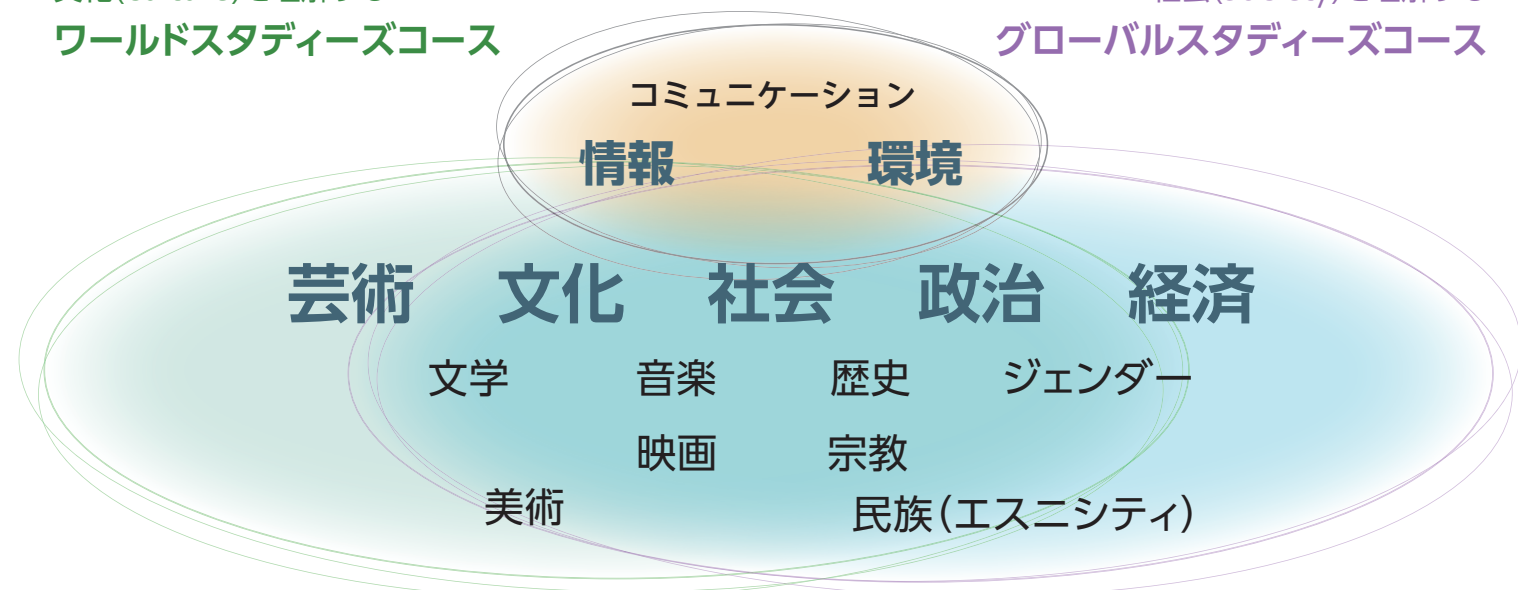
世界教養ブリッジ科目において発見した自分の興味・関心の方向性を基に、2年次からグローバルスタディーズコースとワールドスタディーズコースを選択します。どちらかのコースに軸足を置きながら、1年次の自分の志向に合わせて科目を選択して学びます。

文化(culture)を理解する

ワールドスタディーズコース

社会(society)を理解する

グローバルスタディーズコース



准教授
白井 史人
Fumito SHIRAI

私はドイツの音楽や映画を中心に研究をしています。担当科目「芸術と社会」では、オペラの歴史を通して西洋音楽史の基礎を学び、その背景となった社会との関わりを考えます。オペラというと、敷居が高く、なじみがない人もいるかもしれませんが、『カルメン』や『魔笛』くらいは題名を聞いたこともあるけれど、主人公がとつぜん歌い出すストーリーも良く分からない…。そんな方も多いでしょう。しかし、その歴史をひもとくと、純愛あり、笑いあり、涙あり。不倫も、殺人も、ハリー・ポッター顔負けの魔術にも事欠きません。自分のオペラを上演するために劇場まで建ててしまった作曲家もいれば、ヴァイオリニストをヘリコプターに乗せて空の上で演奏させた変わり者までいます。現在のミュージカルや映画へつながる「総合芸術」として、人間の想像／創造の限界にくだむ壮大な世界が広がっているのです。この授業では、教員の講義を通してさまざまな作品に触れるだけでなく、参加者が一緒に文献を読んだり、関心あるテーマの発表を担当しながら、アクティブに学んでいきます。



准教授
石田 聖子
Satoko ISHIDA

わたしは「映画とメディア」という科目を担当しています。この授業では、「映像文化」に関する文献を受講者全員で講読しながら、写真、映画、テレビ、パソコンといったメディアの誕生が、わたしたちの日々のコミュニケーションや暮らし、社会をどのように変化させてきたのかを学んでいます。メディアは、単にわたしたちの生活の利便性を高めるだけのツールではありません。新しいメディアの誕生は、わたしたちの思考の様式や、社会における知の在りかたにも大きな影響を及ぼすのです。InstagramなどのSNSやプリクラなど、受講生の皆さんに馴染みの深い例も取り上げながら、とすれば抽象的になりがちなメディアの問題を身近な自分たち自身の問題としてとらえ、考えてもらっています。とくに最新のメディアについては、学生の皆さんのほうが詳しいため、わたし自身教えられることも多く、刺激の多い授業です。比較的少人数のクラスのため、和気あいあいとした雰囲気の中で議論をしています。



講師
平山 陽洋
Akihiro HIRAYAMA

「グローバルスタディーズI」「グローバル共生」という2つの授業を担当しています。前者では歴史学という学問の方法を、後者では開発学という学問の方法を学びます。皆さんは、スマホもなく、インターネットもなく、テレビもラジオもなく、新聞や書籍も普及していない過去のある時代に、人びとがどのように情報を得て、物事を考えていたと思いますか？ 過去とは、現在を生きる私たちにとって、なかなか理解するのが難しい「異文化」のようなものです。そうした「異文化としての過去」を検証するのが歴史学であり、その歴史学の方法を「グローバルスタディーズI」では学びます。一方、「グローバル共生」では、「異文化としての過去」が積み重なってできた今日の世界のいびつさを理解します。とくに、なぜ、いま、政治的な力や経済的な力の強い国と弱い国が存在するのか、公正な未来の世界とはどういったものかという問題を検証します。その際に、歴史学、政治学、経済学などの多様な分野を組み合わせたハイブリッドな学問である開発学の方法を学びます。世界の過去や現在をより広くより深く学ぶためのきっかけ、それを、2つの授業で提供しています。



さらに深く幅広く学ぶ72の応用科目や、3～4年次の少人数ゼミナール、研修などがあります。詳しくは大学パンフレットをご覧ください。